

神石高原町読書感想文コンクール入賞者決定!

町では読書への関心を高め、積極的・自主的に本を読むきっかけづくりとして、8月を「神石高原町読書月間」と定め、読書感想文を募集し過去最多の510点の応募をいただきました。入賞者は次のみなさんです。来年度も「黒い雨の部」の募集を行いますので、多数の応募をお待ちしています。

| 部 | 最優秀賞 | 優秀賞 | 特別賞 |
|---------|---------------|---------------|-----|
| 【小学の部】 | 馬屋原由衣 (油木小6年) | 田邊 佑季 (油木小6年) | |
| | 川上 友士 (来見小5年) | 金山 晃士 (神石小4年) | |
| | 矢迫野乃佳 (神石中3年) | 岩谷 愛花 (神石中3年) | |
| 【中学の部】 | 佐伯 彩夏 (神石中2年) | 小林 茉由 (油木高) | |
| | 前原 由佳 (油木高) | | |
| 【黒い雨の部】 | 横山 敬子 (福山市) | 大橋 正明 (町内) | |
| | 柳田 修身 (奈良市) | 吉田ゆんか (東広島市) | |
| | 佐々木真応 (宇治市) | 川上 光 (三和中) | |

(敬称略)

「黒い雨」の部、最優秀賞に輝いた作品を紹介します。

「黒い雨と福島原発事故」 福山市 横山 敬子

「しょう来、がんになりませんように。」
 福島の小学二年生の娘が、今年の七夕の短冊に書いたという。お母さんの新聞投稿文を読んだ時、一瞬胸が詰まりそうになった。無邪気な子ども達までが、福島第一原発の事故以来マスクをしたり、全身肌を露出しない長袖を着用したりで、放射線被曝に日々恐々として過ごしている。

この映像を見ると、子どもの健康を願う母親の気持ちが痛いほどわかる。

亡義父の書棚に「黒い雨」が立てかけてあったのを思い出し手に取ってみると、点々と黄染が付いていたが、この頃では見かけないしっかりとした固い装丁で、毎夏我が家の庭に咲くドクダミを思わせ親近感を抱いた。

開くと義父の日記帳が挟んであった。伝え聞いた話によると、原爆のことを電気爆弾、殺人光線とし、近々福山も新型爆弾が使われるだろう。と恐れ、日暮れと共に家族一同を逃避させ、義父はぎりぎりまで家を守った。と書いてあった。

8月8日、我が家も福山空爆にあって先祖伝来の物を全部焼失し、市街は焼野原になった。

8月6日午前8時15分、天は裂け、地は燃え人は死んだ。戦争は嫌だ。勝敗はどうでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争より不正義の平和がいい。

この章を読んだ時、「そうだ、そうだ。」思わず声を上げた。姪の矢須子の縁談話に「被爆日記」を清書して、世話人に見せるなんて、今では人権問題として絶対許せないが、勿体ないほど喜ばしい縁談とあっては、矢須子の幸せな結婚を必死に願う重松夫妻は、手段なんて考える余裕もなかったのだろう。

矢須子の原爆病の症状が現われ始めた頃、先方から断ってきた。隠し通せるものではなく矢須子自身が先方に宛てて泣きの涙で手紙で知らせたらしい。

この場面を想像すると、夢も希望も膨らむうら若き乙女が、一瞬の閃光によって黒い雨に打たれ、将来に絶望感を抱く。我が身に置きかえると気が狂いそうになるが、矢須子のような体験をした乙女がどれほどいたことか、計り知れない。幾度となく出てくる負傷した人々の描写は想像を絶する。死体の口から蛆のかたまり、焼けた皮膚がだらりと垂れ下が

り剥がす時のうめき声、識別不明な肢体、強い独特の臭気、目を背けたくくなるような地獄絵である。人間は極限の状態にあっても、親は子を庇い、子は母の乳房にすがりつく。悲惨、残酷の言葉しか見つからない。

重松が鯉の稚魚の放養を始めた頃、池の見廻りに行く楽しさを、「おいシゲ子、参勤交代に行ってくるから。」と表現している。

村にも三人の軽症原爆病患者がいる。重松は栄養と休養が病気の進行を喰い止めると信じている。医者への勧めもあって釣をしていると、近所の小母は「お二人とも釣ですか。この忙しいのに、結構な御身分ですな。」と皮肉な口をきいてくる。

原爆病の後遺症のことなど何の知識もなくこんなやりとりになるのだろう。何度となく言われたような気がする。

釣をしている間は人間の思考力が一時的に麻痺するので、釣は熟睡と同じように脳細胞の休養になるようだ。

何故か、義父はこの章に赤鉛筆で線を引いていた。素朴な文体でありながら、多くの人を登場させ絶えず客観的に書かれているが、井伏鱒二は、あまりの惨さに何度も筆が止まりそうになったのではなからうか。

甲奴郡、神石郡、小島村、山野、湯田村、府中町、近隣の町村が出てくるたび頭の中で地図を広げ、空想を膨らませ懐かしかった。

福島第一原発事故は収束の見通しさえ立たず、放射性物質の影響は今も続いている。

ついに食の安全まで脅かす事態になり、各自治体・民間人も独自に調査を始めている。

◎戦争のために使われた原子力
 ◎平和のため、すなわち人間の利便性のために使われた原子力

どちらも人間が生んだ科学技術であるが、一旦爆発すると制御不能に陥り、コントロール出来なくなる。

被爆国がなぜ原発大国になったのか。
 広島をヒロシマ、長崎をナガサキ、福島をフクシマと書き換え世界中に訴えている。

被爆と被曝、絶対に風化させてはならない。
 66年目の8月6日は振り出しに戻った感じがする。

今こそ、日本国民全体が「原子力」について考え直す時が来ている。

夢の中でもいい、五彩の虹が出てくることを祈ってやまない。
 *『黒い雨』(井伏 鱒二・著/新潮社・刊)

「黒い雨」の部、特別賞の「黒い雨から考える平和」川上光さん(三和中)の感想文を、来月号の広報へ掲載します。

審査員長講評(一部抜粋)

最終審査では、どなたも開口一番『黒い雨』の感想文から受けた感銘を異口同音に語られた。何よりこの部の創設を提案してくれた中学生に、ありがとうとお礼を言いたい。事実、中学生から大人までさまざまな年齢層から、また神石高原町にとどまらず町外県外からも応募があった。限定された一つの作品をめぐる、このように開かれた募集がなされるということ自体、全国でも珍しい試みにちがいない、それは作品『黒い雨』にとっても幸いなことだと確信する。

なお、全体の優秀作品集・総評を、町ホームページに掲載しています。

中高一貫教育

『連携型中高一貫教育支援会議』が設立されました

県立油木高校と町立中学校による連携型中高一貫教育を一層推進していくために、「支援会議」設立総会が開かれました。

この会には、油木高校を育てる会・青少年育成神石高原町民会議・神石高原町自治振興連絡協議会・神石郡PTA連合会の4団体を中心とした役員約50名が出席され、会長に牧野町長が選ばれました。

牧野町長は「町民の支援があつてこそ中高一貫教育の効果や成果が上がる」と挨拶されました。来年1月20日(金)三和公民館で「先進地(島根県飯南町)の取組みに学ぶ」研修会の開催なども決定されました。



新しい学校配置方針説明会を開催しています。

町教育委員会では、本年策定した新しい学校配置方針を、地域へ伝える目的で11月から地区説明会を行なっています。

11月21日(月)に油木地区、30日(水)に豊松地区、12月1日(木)、8日(木)に神石地区でそれぞれ行いました。参加された方からは、地域の思いや保護者等の意見を十分聞いた上で、各種事業を進めて欲しいなどの意見が出されました。

教育委員会では、各会場で出された意見を尊重し、今後も説明会や情報の提供に努めていくこととしています。



地域を変える新しい力

地域おこし協力隊活動だより

その4

地域おこし協力隊の活動を紹介していく連載コーナーです。

沖本 成昭 (35歳) 広島市出身

2カ月の活動を振り返って

はじめに私は、協力隊に応募するにあたって、自分が地域おこしにどのように役にたてるかを考えました。私は、ビジネスマナーやパソコンスキル、政治経済などビジネスマンとしての能力が相当弱いです。そんな私ですが地域おこしに期待されていると思うことは、「アイデア」です。

昔から他人が考えないことを考えるのが好きで、役立てられる武器になると考えています。



農業実習

実際に活動が始まり、まず感じたことが事の深刻さです。小さな頃から祖父の家で過ごした神石高原町の全体像として大雑把に考えていたのですが、支援員の方に案内していただいた消滅した集落

を見たときに、これは早急になんとかしなければと強い使命感を感じました。そして、そのような過疎・高齢化への全国の対策事例をいろいろと見せていただきましたが、その多くがその場しのぎの対策で、根本解決につながるもの(つながらないと解いてもそれがばかりに時間割を割かざるを得ない)という状況でした。

協力隊就任初日、まちづくり推進課担当者から「単なる労務提供で終わってしまったらダメだ。協力隊がいなくなった後も地域がまわっていくシステムづくりをしないと。」と聞いていたのを思い出しました。その場しのぎではない、根本解決につながることをだけを専門的に考え続けられる職こそが私たち協力隊であると思っています。

そして、その根本解決こそが私が当初から掲げる活動目標である「若者が魅力を感じる田舎づくり」であると再確認しました。短絡的ですが、若者が増えれば多くの問題が解決します。アイデアを押し出し、都市部から若者を呼び集め、全国を注目させるような活動にしていけるようがんばります。



集落支援員から地域の状況説明を受ける